

第十一編 観光

第一章 合併以降の観光振興

平成に入り、「地方分権」と「市町村合併」の流れの中で、旧早来町・旧追分町は平成十木（二〇〇四）年四月に「早来・追分合併協議会」を設置し、各種事務事業の調整と町民説明を重ねた。そして、分村から五十三年を経た平成十八年三月二十七日、両町は「安平町」として再び一つの町になった（安平町企画財政課「第二次安平町総合計画」安平町、二〇一七年三月策定）。その合併に先立って、平成十七年三月、同協議会は、旧早来町・旧追分町の地域特性を考慮しつつ、新町としての均衡ある発展を目指して、平成十八～二十七年までを計画期間（目標年度は、平成二十七年十二月には平成三十二年度に、さらに令和三年三月には令和七年度に変更）とする「新町まちづくり計画」を策定した（早来・追分合併協議会「新町まちづくり計画」平成十七年三月）。

安平町における観光振興は、旧早来町・旧追分町合併後の新たなまちづくりの中で、大きな期待を集め、各種地域振興計画においても重要な政策課題として位置づけられた。合併後の新町における観光振興の課題は、地域経済の安定と旧早来町・旧追分町の観光資源が偏在していることであつた。すなわち、早来地区はゴルフ場や牧場といった豊富な観光資源を有していたが、追分地区ではそのような観光資源が少なく、観光による経済効果が限定的であつた。平成十七年度の観光入込客数を見ても、早来地区は三万二〇〇〇人であつたのに対して、追分地区は半分以下の一万五〇〇〇人にとどまっていた（図表「————」参照）。

図表「————」入ル

よりした観光資源の地域的偏在を是正するため、早来地区は「回遊・滞在型観光を目指す」新たな観光的魅力づくりを、追分地区は「追分町」の周辺における産業・観光機能の集積」と「鉄道文化や自然資源を活かした新たな観光的魅力の創出」を目指す方針が示された。この方針に基づいて、重点プロジェクトには、追分地区における「道の駅」の整備や観光関連施設の開発、地域産業の活性化と新たな雇用の場の創出をはじめ、鶴の湯温泉やぬくもりの湯の有効活用、地域の特産品を使った新たな名物創出のためのコンテスト開催、体験農業施設やパークゴルフ場を生かした観光振興、赤いひまわり・スズランやミズバショウなど花をテーマとした観光の振興、周辺自治体との連携による広域観光ルートの形成が掲げられた。

平成十九年三月に策定された「第十次安平町総合計画」（計画年度は平成十九年度～平成二十八年度）も、基本的には「新町まちづくり計画」を継承したものであつたが、まちの将来構想に、都市計画上の「拠点」とそれを結ぶ高規格幹線道路等の「軸」という考え方を新たに導入した。そして、大規模公園・安平山スキ場・温泉を「観光・レクリエーション拠

点」と位置付け、将来的には瑞穂ダム周辺や安平川上流域域を新たな拠点として活用する計画を立てた。また、統一的な案内看板の整備等によって、観光客の回遊性を高めることも狙いとした。

主要施策については、新たに「東胆振地域ダム湖ネットワークの形成」が加わった。この施策では、新千歳空港や苫小牧に隣接する地理的優位性や交通の利便性を生かし、旧早来町・旧追分町・厚真町・旧穂別町に共通する資源であるダム湖等を結ぶ周辺ルートを設定し、交流人口の増加を図るものであった。これら施策の展開によって、年間約四〇万人の観光客を地域内に引き込むという数値目標が掲げられたが、この目標の達成は令和元（二〇一九）年度を待たねばならなかった（前掲、図一、参照）。

先述のように、広域観光ルートの形成については「新町まちづくり計画」でもうたわれていたが、平成十五年に、国が掲げた「観光立国」では、「広域観光」の推進が観光振興上の重要な課題となった。つまり、観光分野でのグローバルな競争の中で、地域活性化を図る手段として広域観光が掲げられたのである（太田隆之「連携に基づいた広域観光振興の現状と課題」伊豆観光圏を事例に、「静岡大学人文学部『静岡大学経済研究』」十六巻四号、二〇一二年二月二十八日）。この広域観光の推進に関しては、昭和四十七（一九七二）年に東胆振十市四町（苫小牧市・由老町・安平町・厚真町・むかわ町）は、各自自治体のポテンシャルの高さを地域活性化に生かすべく、広域市町村圏の指定を受けている。この圏域の自治体が基盤となつて、平成二十年から全国で展開された「定住自立圏構想」では、「東胆振定住自立圏」が形成された。この構想の中では、地域ブランドの推進事業として、「地場産品のPRや産業振興に関する連携」および「東胆振地域ブランド創造協議会」の設立が掲げられた（北海道苫小牧市『東胆振定住自立圏共生ビジョン』平成二十七年十月）。

一方、人口減少によつて地域社会が縮減に向かう中で、回遊・交流の促進による観光振興は肝になる政策課題の一つである。『安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略』（平成二十七年三月）および『第二期安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略』（令和三年三月）において、地域の観光資源を活用した回遊・交流の仕組みづくりに向けて、道分地区に建設予定の道の駅（平成三十一年開業）を中核施設として、菜の花・瑞穂ダム・ゴルフ場・温浴施設・サラブレッドをサテライト施設とする「回遊・交流ネットワーク形成事業」を展開するための仕組みづくりや安平町観光協会の法人化をうたった（安平町「安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略」平成二十八年十月および同「第二期安平町まち・ひと・しごと創生総合戦略」令和二年十二月）。これに加え、スポーツ交流の推進やグリーンツーリズムの推進、合併一〇周年を契機とした地域間交流の推進といった新機軸を打ち出している。

このうち、グリーンツーリズムの推進に関しては、食関連産業と観光関連産業が北海道の成長分野と位置づけられたことが背景にあり、安平町では平成二十九年三月に策定された「第二次安平町総合計画」（平成二十九（令和八年度））において、道の駅の整備などの拠点整備に加えて、グリーンツーリズムの推進を重点プロジェクトに掲げている（安平町企画財政課「第二次安平町総合計画 基本構想」平成二十九年三月）。さらに、「農村滞在型余暇活動機能整

備計画（あびらグリーン・ツーリズム）では、安平町が目指すグリーン・ツーリズムの戦略目標が示されており、農業と観光、食品製造業などの関連産業を結び付けて、農村での滞在型余暇活動を促進する施策として位置付けられた。このグリーン・ツーリズムの推進により、安平町固有の美しい自然や伝統文化を生かし、都市住民に「ゆとりと安らぎ」を提供するとともに、地域経済の活性化と交流人口の拡大を目指したのである（北海道安平町「農村滞在型余暇活動機能整備計画」あびらグリーン・ツーリズム推進計画、平成三十年四月）。

なお、令和五年七月には、前計画の期間満了に伴い、令和九年度までを計画期間とする計画を策定している。

令和二年から流行が始まった新型コロナウイルス感染症の拡大によって、観光施設の入場制限やイベントの中止等により安平町の観光は痛手を被ったが、デジタル技術の急速な進展やテレワークの普及に伴う地方移住への関心の高まりを背景に、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の抜本的見直しが行われた。これまで推進してきた回遊・交流に関する観光政策を継続すべく、令和五年度から五カ年の新たな総合戦略「安平町デジタル田園都市国家構想総合戦略」を取りまとめた（安平町政策推進課「安平町デジタル田園都市国家構想総合戦略」（人口・デジタル・総合戦略）令和五年十月）。

安平町の初代町長に就任した瀧孝は、「平成十八年度町政執行方針」において、町政運営の基本姿勢として、早来地区と追分地区の特性や特色を最大限に活かし、均衡ある発展を目指す方針を示すとともに、当面する重要課題として「新町まちづくり計画」を継承した「第一次安平町総合計画」の策定を掲げた（平成十八年度町政執行方針）。

合併時に策定された「新町まちづくり計画」では、地域資源の活用と各地区の連携を基本とした地域別におけるまちづくりの方向性が定められ、観光振興に関して、早来地区は「回遊・滞在型観光を目指した新たな観光的魅力づくり」、追分地区は「追分町IC周辺における産業・観光機能の集積」と「鉄道文化や自然資源を活かした新たな観光的魅力の創出」がそれぞれ示された（「新町まちづくり計画」）。

この「新町まちづくり計画」で示された観光振興の方向性を踏まえて策定された「第一次安平町総合計画」では、「恵まれた立地条件を活かしたまちづくり」を基本目標に掲げ、現状でも年間約四十万人の観光客が町内に訪れているといった大きな可能性を最大限活用することで、町の魅力を発信し、観光を地域活性化の起爆剤とすることが期待された。

これら基本目標に基づく観光振興施策として、町内の主要観光施設をクラスターステーションの拠点施設に指定するとともに、新たな観光資源の発掘や整備を推進し、地域資源を活かした観光コンテンツの開発に取り組んだ。また、「鶴の湯温泉」の活用に関する検討を行い、民間活力の導入を視野に入れた整備を進めたほか、花をテーマとした観光振興の推進、新たな特産品の創出や各種イベントの開催支援などにより、観光客誘致の強化を図った。

また、広域的な観光振興の観点から、町内観光ルート開発や広域観光ルートの形成を進めるとともに、東胆振地域のダム湖ネットワークとの連携を図ることで、さらなる観光需要の喚起を目指した。

「第一次安平町総合計画」におけるこれらの取り組みは、安平町の観光基盤を確立する重要な施策となり、今後も地域資源を活かした観光戦略を展開することで、さらなる交流人口の拡大と地域の賑わいの創出を目指していくことになった（「第一次安平町総合計画」）。

このように『第一次安平町総合計画』では、既存の観光資源の有効活用や新たな観光資源の開発により、観光振興の基盤整備が進められてきた。しかし、町内での回遊や周遊をさらに促進するためには、町の魅力を発信する拠点づくりとともに公民連携による観光振興が急務であり、さらには、グリーンツーリズム推進による農業の魅力や地域の情報発信など新たな課題も浮き彫りとなった。

図表11-1-1 入ル

「第一次安平町総合計画」の成果と課題を受けて策定された「第二次安平町総合計画」（二〇一七―二〇二六）における観光分野では、公民連携による回遊・交流事業の推進を基本施策として、道の駅をはじめとする交流拠点施設の整備を進めるとともに、観光協会を中心に町民・関係機関・行政が一体となって観光コンテンツの開発を推進し、交流人口の拡大を図ることで地域活性化を目指す方針が示された。

この方針に基づき、観光振興の具体的な取り組みが進められた。まず、道の駅を拠点としたプロモーションや情報発信やイベントを行い、観光誘客の強化を図るとともに、交流人口・関係人口の拡大を目指し、回遊・交流ステーションの形成事業を推進した。さらに、民間企業が実施するワイン醸造と連携した特産品のコラボレーションやワインツーリズムの展開、日本遺産「炭鉄港」や「北海道いぶり五大遺産」を活用した広域連携事業の促進にも取り組んだ。

また、官民連携による受入れ体制の構築を検討し、公共施設を活用した合宿誘致の促進に向けて、高校・大学・企業等のスポーツ合宿や大会の誘致を進めた。これにあわせて、早来町民センターの大規模改修に合わせた合宿施設機能の整備も行われた。

さらに、道の駅をはじめとする交流拠点施設の環境整備を進め、あびら交流センターの改修や追分ゲートウェイ整備プロジェクトの実施、回遊交流案内看板の修繕や誘導看板の設置検討などを行った。加えて、高速道路からの一時退出に係る要件緩和を要望するなど、アクセス面の向上も図られた。

加えて、農業体験を中心としたグリーンツーリズムの推進にも力を入れ、収穫体験をはじめとする観光コンテンツの開発を進めた。官民連携による受入れ体制の整備や人材育成にも取り組み、次期あびらグリーンツーリズム推進計画の策定を行った。

これらの取り組みを通じて、観光基盤の整備が進む中で、観光資源を活用した町全体の認知度向上が着実に図られてきた。観光振興を地域経済の活性化や地域連携の深化に向けた重要な柱として位置づける安平町では、観光客数の推移がその成果を如実に示している。

平成三十一（二〇一九）年に「道の駅あびらD51ステーション」が開業したことにより、

安平町の観光客数は飛躍的に増加した。特に当該年度における大幅な伸びは、同施設の開業前後におけるプレイイベントや積極的なプロモーション活動が奏功した結果と考えられ、安平町の観光振興において画期的な出来事であり、その後も町の重要な観光資源としての役割を担っている。

しかし、安平町の観光にとって大きな痛手となったのが、平成三十（二〇一八）年九月六日に発生した北海道胆振東部地震である。この地震は、町内にも大きな被害をもたらし、住宅や公共施設が損壊し、交通網が一時的に麻痺した。この未曾有の災害は、町の観光業に大きな打撃を与えたが、一方で、町民の結束力の高まりやボランティア活動による復興支援など、新たなつながりを見出す契機にもなった。

しかしながら令和二（二〇二〇）年以降、新型コロナウイルス感染症の影響である。観光客数は一時的に減少し、旅行制限や外出自粛が強く求められたことから、「道の駅」を含む多くの観光施設で入込客数が落ち込む事態となった。それでも、令和三〜四年にかけては徐々に回復の兆しが見られ、町の観光需要が再び高まりつつあることが確認できる（図表1-1-1-2参照）。

図表1-1-1-2 入ル

第二章 観光拠点としての道の駅と観光協会の設立

第一節 道の駅あびらD51ステーション

前述のように、道の駅あびらD51ステーションは、安平町における観光振興の中核施設として整備が進められた。道の駅とは、地域の創意工夫により、道路利用者に快適な休憩と多様な質の高いサービスを提供する施設であり（国土交通省ウェブサイト）、自治体の観光振興にとって重要な施設である（松田泰明「道の駅」の「これまで」と「これから」―特集をはじめにあたって―公益社団法人日本技術士会北海道本部『コンサルタンス北海道』第十四号、二〇一九年六月―）。

平成三十一（二〇一九）年四月十九日に開業した安平町の道の駅は、図1-1-2に示したように、安平町の地域資源を生かした回遊・交流を促進し、急激な人口減少に負けない地域力を醸成するための拠点として整備されたものである（図1-1-2参照、北海道安平町「社会資本総合整備計画書―追分・早来地区・都市再生整備計画」（第四回変更）令和元年十二月十一日）。

図表1-1-2-1 入ル

この道の駅の建設について、安平町は、住民の意思を尊重しながら慎重に進めてきた経緯があり、平成二十六（二〇一四）年に追分公民館で開催された「あびら夢・未来二〇一〇人フオーラム」のワークショップでは、昭和時代の駅舎の再現や観光スポット・特産品・文化歴史に関する情報発信パネルの設置など、後にこの道の駅の特徴となる提案が行われた（広報あびら№110五、二〇一四年十二月）。

平成二十七年三月には、施設のコネクトや機能等の基本設計が完了し、これを基に、町民にその必要性を理解してもらうため、町は平成二十七年五月および六月に計十二回の町民説明会を開催した（図表1-1-2-2、参照、『広報あびら』№113三、二〇一六年六月）。その際、説明会で寄せられた質問に対応し、追分地区に道の駅を建設する理由として、千歳市をはじめとする近郊エリアからの誘客、鉄道遺産の活用、早来地区と追分地区の観光資源の偏在、道の駅の観光目的地化、町内の回遊性の向上を挙げた。財源については、国の補助金等を活用して、可能な限り町の負担を軽減する方針を示した（図表1-1-2-3、参照、『広報あびら』№113二、二〇一五年八月）。八月には実施設計業務が開始され、同月～十二月まで、町民や役場職員で構成された道の駅検討部会を設置し、分野ごとに「販売部会」「デザイン部会」「農産物直売所部会」「鉄道部会」を発足させて、意見交換を行い、協議結果を実施設計に反映させていった。さらに、町民説明会での意見や質問に基づいて計画の検証を行い、九月十三日に開催された議会全員協議会で、公共部門に関する行政負担、民間部門との負担割合、ランニングコスト、国道十三四号の交通量、立寄総定数等の説明と報告が行われた（『広報あびら』№117七、二〇一六年十月）。

図表1-1-2-2及び図表1-1-2-3入ル

平成二十八年には、道の駅の完成予想図や平面図などの実施設計が完了し、敷地面積九十九・八〇平方メートル（うちセンターハウスの延べ床面積九九〇・一二平方メートル、工事費九億九千五百万円）の円（国交省補助金を活用）といった施設工事に係る全体像が明らかになった。道の駅には、町の活性化を促進するための四つのステーション機能（食の魅力発信ステーション機能、交流促進ステーション機能、観光情報ステーション機能、文化・歴史ステーション機能）が備えられ、特産品PR強化と販路拡大、町民と来訪者の交流促進、観光ルートや施設情報の発信、地域に根付く歴史や文化の理解促進といった効果が期待された。また、来館者が快適に滞在できるようにさまざまなコーナー（無料休憩コーナー、SL車庫、テイクアウトコーナー、ベーカーコーナー、特産品販売コーナー、農産物直売所）が設けられることになった（「安平町Webサイト」より）。

実施設計が完了し、その後、必要な手続きを経て、工事請負契約の準備が進められた。平成二十九年六月二十一日に開かれた六月定例議会において、工事請負契約が議決され、同月二十八日に本契約が締結された。翌二十九日から建設工事が開始され、工事期間は、平成三十年十一月末までの二年間とされた（『広報あびら』No.1336、二〇一七年七月）。

その後、道の駅の開業に向けた動きが加速していった。まず、道の駅で販売する商品の開発やブランディングにおいて、安平町ならではの多彩な商品が施設の魅力や来訪者の満足度向上につながることから、町は「道の駅特産品開発事業補助金」（町内外の企業や町内事業者が主な対象）と「道の駅特産品開発チャレンジ支援事業補助金」（町内団体や町民が主な対象）を創設して、新商品開発に取り組むことになった（『広報あびら』No.1335、二〇一七年八月）。七月十四日、補助申請のあった七件について、本格的開発を進めることになった（図表1-1-2-4、参照。『広報あびら』No.1337、二〇一七年八月）。

図表1-1-2-4、入ル

道の駅の名称については、平成二十九年十月五～三十一日の間に募集が行われた。三三四件の応募があり、慎重に選考を重ねた結果、安平町在住の太西秀貴さんが提案した「道の駅あびらD51ステーション（あびらでどいちすてーしょん）」に決定した。平成三十年十月五日、瀧町長と一般社団法人あびら観光協会的小林会長から太西さんにお祝いの言葉が贈られ、表彰状と記念品が授与された（『広報あびら』No.1441、二〇一四年十二月、二〇一八年十月）。

道の駅の運営については、一般社団法人あびら観光協会が指定管理者として担うことになった。その前身である安平町観光協会は、平成二十一年に早来・追分両地区それぞれの観光協会が合併して組織されたもので、それ以降、任意団体として活動してきたが、平成二十八年

胆振東部地震で被災した安平町を支援した災害ボランティアの方々への感謝を伝えるため、町民と「安平町復興加速実行委員会」が協力して実現したものである。当日は、復興活動でお世話になったボランティアのうち十四六人がイベントに参加し、イベントを通して感謝の気持ちを伝えた（『広報あびら』No.154（二〇一九年四月）、No.155（二〇一九年五月）、No.157（二〇一九年七月））。

道の駅あびらD51ステーションの建設 道内一二四番目の道の駅として平成三十一（二〇一九）年四月十九日に開業した道の駅あびらD51ステーションは、安平町観光の新たな拠点として、地域の歴史と未来を結ぶ象徴的な存在である。この道の駅にはシンボリックな存在として、追分地域の誇りであるD51320号蒸気機関車が保存展示され、地域特産品や加工品の提供とともに、訪れる人々へ安平町が歩んできた歴史と鉄道文化・遺産の双方の魅力を体感してもらっている。開業初年度に八七万人もの集客が得られたこの施設の集客効果は観光だけにとどまらず、地域活性化の拠点としての役割を担い、町の可能性を広げる施設となっている。

しかし、この施設建設にあたっては、議会・町民を大きく二分する論争が展開された。

建設経過 道の駅建設構想は平成十六（二〇〇四）年の旧追分町時代にまで遡る。当時、旧早来町と旧追分町は合併協議が進行していたが、その一方で、旧追分町は自立の道を決断した場合を想定した「第三次追分町総合計画」を策定していた。

この計画には、同年四月に新町長として就任した瀧孝の公約に基づき、地域の様々な観光要素を繋げる拠点づくりとして道の駅建設構想が明記された。また、これ以前の平成六年時点での旧追分町新長期総合計画では、旧追分町の地域発展の象徴である鉄道をモチーフとした「鉄道文化公園」の整備が計画されている。

これらは実現に至らなかった施策ではあるものの、平成十八年三月二十七日の合併により誕生した安平町の「第一次安平町総合計画」にも引き継がれた（クラスターステーション・鉄道資料館の記述）。

潮目が変わったのは平成二十六年四月である。瀧町長が初代安平町長としての集大成として臨んだ第三期目の出馬において、旧追分町が構想していた観光拠点施設と鉄道文化施設を一つにした道の駅を追分柏が丘地区に建設することを公約として掲げ、無投票当選後の六月定例町議会に施設建設に係る基本設計費を予算計上するに至り、その実現が現実味を帯びてきた。

一方で、議会・住民はこの建設に対して懐疑的な声も多かった。完成した基本設計に基づいて平成二十七年五・六月に計一二回にわたって行われた「重要施策に係る町民説明会」では、施設運営費に関する町の試算に対し、これを不安視する多くの町民の意見があり、町議会議員もこうした町民の声を反映し、町議会では施策成功に向けた町の具体的な対応策の答弁が求められ、その都度、町は対応策を検討し、議会に対して説明が行われたが、整備後の

運営を不安視する声はなくなり、建設実現は進まなかった。

その後一〇年にわたり建設推進派、反対派の間で数々の議論があったが、平成二十九年度になってようやく予算は成立し、ここに鉄道文化を象徴とする安平町の道の駅建設が実現することとなった。

施設概要と建設 道の駅は、国と町による一体型施設とし、国（北海道開発局）による駐車場整備敷地を合わせ、全体で約一万五七四五平方メートル、駐車台数一一七台、二四時間トイレを備え、施設はセンターハウス（テイクアウトコーナー、特産品販売コーナー、ベーカリーコーナー、アトリウム、レガシーギャラリー、観光・情報コーナー）、農産物直売所とともに、本町の指定郷土資料D51320号機や関連資料を展示する鉄道資料館と屋外に車両を展示するSL広場で構成される。また、施設の南側の隣接地には子育て世代を意識した柏が丘公園も整備する計画とされた。

特に追分地区は鉄道のまちとして栄え、日本で最後にSLが走った町でもあり、町内の元国鉄職員で構成される追分SL保存協会が整備するD511320号機を旧鉄道資料館（現鉄道資料保管庫）に移設して道の駅に展示するとともに、道の駅開業後は定期的に屋外展示できるように、SL広場までの線路を敷設するなどの斬新な構造が特徴である。

当初、平成三十年九月中旬にSLを建設現場へ移設する予定であったが、同年九月六日に発生した北海道胆振東部地震により、建設中の道の駅と保管予定の鉄道資料館が地盤沈下するなどの被害を受けたため、開業後の平成三十一年六月に延期されることとなった。

写真 D51移設中の写真入ル

道の駅の建設事業費は、道の駅の建設事業費は約十億二千万円で、財源については社会資本整備総合交付金や地方創生推進交付金などの国庫補助金のほか、合併特例債と北海道地域づくり総合交付金をセットで活用するとともに、ふるさと納税で寄せられた寄附金を道の駅建設に充当することで、一般財源による負担を極力軽減することに努めた。

開業後の展開 道の駅開業後の令和元（二〇一九）年九月十八日、「あびら復興感謝フェス！」が開催された。このイベントは、北海道胆振東部地震で被災した安平町を支援した災害ボランティアへ感謝を伝えるため、町民と「安平町復興加速実行委員会」が協力して実現したものである（『広報あびら』N.〇・一五四（二〇一九年四月）、N.〇・一五五（二〇一九年五月）、N.〇・一五七（二〇一九年七月））。

さらに、安平町の観光振興と鉄道文化の継承を目的として、クラウドファンディングを活用した特急列車「キハ183系」の保存プロジェクトが実施された。平成三十（二〇一八）年一月～三月末にかけて全国の支援者から千三百万円以上の資金が集まり、プロジェクトの結果、「キハ183―214」は道の駅あびらD51ステーションに、「キハ183―220」

は鉄道資料保管庫に保存されることになった。特に「あびらD51ステーション」では、「鉄道文化の未来継承」をコンセプトに、保存車両が展示され、道の駅のシンボルとして活用されている。また、保存活動の継承と広報活動を目的にた。「キハ183系・特急おおぞら保存会（仮称）」が設立された（安平町WEBサイトおよびREADYFOR WEBサイト「北海道・鉄道史の誇り。往年の「特急おおぞら」を国鉄色で未来へ」）。

開業から一年後の令和二（二〇二〇）年七月三日には来場者が一〇〇万人を達成し、観光拠点としての役割を果たしている。このように、道の駅あびらD51ステーションは、観光拠点としての機能だけでなく、地域経済の活性化や文化遺産の保存にも大きく貢献している。

第二節 一般社団法人あびら観光協会

平成二十（二〇〇八）年五月二十八日、「安平町観光協会総会」（安平町観光協会一元化総会）が開催され、旧早来町と旧追分町にそれぞれに存在していた観光協会を統合し、新たに「安平町観光協会」が設立された。同協会は「安平町の観光事業の育成発展及び特産品の宣伝紹介並びに地場産業の育成を図って、まちの観光及び産業の振興に寄与すること」を目的としており、観光イベントの企画運営、観光資源の調査・保護、特産品の宣伝、観光情報の発信など、多岐にわたる活動を展開することで、地域全体で観光振興を推進していく方針が示された。

総会で来賓として挨拶した瀧孝町長は統合の意義について「観光協会の一元化により、早来・追分の両地区が連携し、安平町全体としての観光振興が可能になることは、地域活性化に向けた大きな前進である」と述べた。また、地域ブランドとしてアサヒメロンの商標登録を進めていることにも触れ、「地域資源を活用したブランド化が町の観光と産業の発展に繋がる」と強調した。この総会で役員として、会長に小林正道、副会長に真鍋高一・土田耕啓・澤田弘士・楠野公夫が就任した（安平町観光協会総会議案）。

この「安平町観光協会」は任意団体として活動が続けられたが、平成二十八年四月一日に一般社団法人あびら観光協会（以下、あびら観光協会）として法人化された。これにより、資金の借入や旅行業への登録などが可能となり、観光事業の展開がさらに広がることが期待された（『広報あびら』No.1113、二〇一六年六月）。

道の駅の運営についても、あびら観光協会が指定管理者として担っているが、道の駅の指定管理者は、施設の設置目的と団体の設立目的が合致する町内の法人が担うことが重要であるという考えのもと、平成二十八年十一月に、あびら観光協会を候補団体として選定し、「道の駅あびらに係る運営・開業準備の協議に向けた協定書」を締結。運営手法や販売品の検討に関する約二〇項目の協議を進め、平成三十年三月に全項目の協議が終了し、「協議終了書」を取り交わされた。同年六月に開催された第四回安平町議会定例会において、あびら観光協会を道の駅の指定管理者として指定することが議決され、同年七月三日に道の駅あびらD51ステーション指定管理者基本協定書の調印式が行われた。調印式には、あびら観光

協会から小林代表理事・田上専務理事・高津事務局長が出席し、町から及川町長・村井副町
長・地域推進課道の駅経営推進グループの職員が参加した『広報あびら』N°一四九、二〇一
八年八月）。

第三章 安平町の主な観光資源

第一節 鹿公園と町内のキャンプ場

鹿公園の概要 「鹿公園」は、明治三十五（一九〇二）年に日本で最も早く保健保安林として指定された歴史的な公園で、JR追分駅から西へ約五百メートルというアクセスの良い場所にある。この公園は、町民や観光客の憩いの場として長年親しまれており、安平町の自然や文化を象徴する場所の一つである（安平町WEBサイト）。公園内にはキャンプ場の他、多彩な施設が整備されており、来場者が季節を通じてさまざまなアクティビティを楽しむことができる（図表11-3-1、参照）。

図表11-3-1 入ル

鹿公園という名称にある通り、公園内ではエゾシカが飼育され、訪れる人々に親しまれている。昭和四十六（一九七二）年には、初めて様似町から雄と雌のエゾシカが導入され、「ポッポくん」「ポッピーちゃん」と名付けられた。その後、自然繁殖により徐々に数を増やし、現在では複数頭のエゾシカが公園内で飼育されている。エゾシカは、公園の象徴として親しまれ、鹿公園は観光客や地元住民の間で人気のスポットとなっている（『広報あびら』N.〇・一八八、二〇二二年二月）。

鹿公園の整備 鹿公園では、平成三〇五（一九九一）～一九九三年度にかけて大規模な整備事業が実施された。これにより、イベント広場・キャンプ場・憩いの広場・遊歩道・管理棟・屋外ステージ・バーベキューハウス・動物ハウス・**四阿^{あずまや}憩所**等が整備された（平成二十八年四月作成 鹿公園管理区域（鹿公園の沿革））。さらに、平成二十五年にかけては、パークゴルフ場や子ども向け施設、ドッグランの整備が行われ、地域住民や観光客がより快適に利用できるようになった（『広報あびら』N.〇・四九、二〇二〇年四月、N.〇・一五四、二〇一九年四月）。

鹿公園キャンプ場（追分白樺二二） 鹿公園内のキャンプ場は、四月下旬～十月下旬まで営業し、令和二（二〇二〇）年からは予約制の「手ぶらキャンプ」プランも提供されている。この手ぶらキャンプは、テントやシュラフ、焚き火台などの基本的なキャンプ道具が一式貸し出され、キャンプ初心者や道具を持っていない人でも気軽にアウトドア体験ができるよう工夫されている。利用者は食材や飲み物を持参するだけで、すぐにキャンプを楽しむため、特に家族連れや観光客に人気がある（安平町なび）。また、フリーサイトや区画サイトもあり、それぞれのスタイルに合わせたキャンプが楽しめるようになっている。

『広報あびら』No.一六八、二〇二〇年六月、No.一二三、二〇二〇年十一月）。

また、近年はキャンプブームの影響やアウトドアへの関心の増加を背景に、鹿公園キャンプ場およびときわキャンプ場（後述）の利用者数が増加傾向にある。特に、道内（町外）からの来訪者が多く見られ、これらのキャンプ場が町外観光客の受け皿として重要な役割を果たしていることが分かる。

図表1132 入ル

鹿公園の四季折々の自然 鹿公園は、豊かな自然環境がその特徴であり、四季を通じてさまざまな植物や動物を見ることが出来る。春にはミズバショウやエゾヤマザクラが咲き、緑豊かな風景が訪れる人々を迎える。夏には**ネボラン**やスイレンが美しい姿を見せ、さらに夜にはホタルが舞う幻想的な光景も楽しむことができる。秋には**サクラモミジ**やイチヨウの葉が色づき、冬には雪が積もること、静寂の中に佇む木々が幻想的な雰囲気醸し出している。鹿公園は季節ごとの自然美を満喫できる場所として、来園者の心を癒している（『広報あびら』No.一八八、二〇二二年二月および安平町WEBサイト）。

鹿公園で開催されるイベント 公園内では「おいわけメロンまつり」などの大規模なイベントも行われ、町内外から多くの人々が訪れる。おいわけメロンまつりは、旧追分町が昭和五十七（一九八二）年に開基九〇周年を記念して開始されたイベントで、合併後には安平町の夏の恒例行事の一つとして開催された（安平町なび）。平成十八年のメロンまつりには町内外から約三万二千人が訪れ、特設ステージや露店が並び公園内は活気に満ちた。また、ファントサル交歓会やパークゴルフ大会などの協賛イベントも同時に開催され、来場者はスポーツやグルメを楽しみながら真夏のひとときを過ごす（『広報あびら』No.五二〇の六年八月、No.九、二〇〇八年八月）。

ときわキャンプ場（早来北進一〇二五） 「ときわキャンプ場」も、近年のキャンプブームの影響で訪問者が年々増加している人気の施設である（安平町WEBサイト）。毎年春から秋にかけてのキャンプシーズン中、多くの利用者が自然豊かな環境の中でアウトドア活動を楽しんでいる。**ときわキャンプ場でも、令和三（二〇二一）年から「手ぶらキャンプ」の受け入れを開始し、必要な道具を取り揃えている（安平町WEBサイト）。**

このキャンプ場には、七〇坪の巨大滑り台やアスレチック設備が整い、家族連れや初心者キャンパーにとっても使いやすいキャンプ場である。宿泊設備としては、バンガローとツリーハウスがそれぞれ一三棟と一〇棟あり、どちらもコンセントと照明を備えている。隣接する公園には多様な遊具もあり、子どもから大人まで楽しめる施設となっている（『広報あびら』No.一六六、二〇二〇年四月）。

その他のキャンプ場 安平町には、先述の鹿公園キャンプ場やときわキャンプ場の他に、民間が運営する「弥生パークキャンプ場」と「ファミリーパーク追分キャンプ場」がある。「弥生パークキャンプ場」（追分弥生一五〇）は、広々とした芝生のフリーサイトで、テントを自由に設営できるキャンプ場である。芝生の上でゆったりとした時間を過ごせるように整備されており、ドッグランも備えている。また、「ファミリーパーク追分キャンプ場」（追分旭六四八）は、フリーサイトのオートキャンプ場を併設している。キャンプ場内にはドッグランを備えた貸切サイトやコインシャワー、炊飯場、食堂などの設備が充実している。オートサイトは車の乗り入れが可能となっている。冬キャンプを楽しむこともできる（一般社団法人 あびら観光協会『安平町 黄色の絨毯の上で。』および一般社団法人あびら観光協会WEBサイト）。

パークゴルフ場 安平町には複数のパークゴルフ場があり、それぞれが異なる魅力を持っている。これらのコースは初心者から上級者まで楽しめるように設計されており、安平町はパークゴルフ愛好者にとって魅力的な場所になっている。

安平町のパークゴルフ場

ときわ公園パークゴルフ場（早来北進一〇二五）

一八ホールからなるこのコースは全長八七六メートル。ときわ公園内の自然に囲まれた環境で、木々の間を縫うようにプレーするチャレンジングな設計が魅力である。

佐藤観光農園パークゴルフ場（早来北進三九二）

三六ホールと充実した規模を誇り、芝の手入れが行き届いたコースはファミリーから上級者まで楽しむことができる。季節ごと農園で採れる新鮮な野菜の直売も行われている。

安平山パークゴルフ場（追分豊栄一九五二）

四五ホールからなる安平山の自然の地形を相談した活かしたコースで、初心者から上級者まで対応可能である。日本パークゴルフ協会の公認コース（N・四〇七）として整備されている。

佐藤冬季室内パークゴルフ場（早来北進三九二）

冬季限定でビニールハウス内に赤コース（一八一メートル）と白コース（二〇一メートル）の二七ホールが用意されており、季節を問わず楽しめる室内施設である。室内は天然芝で、夏場と変わらないパークゴルフを楽しむ。

鹿公園パークゴルフ場（追分白樺二二二）

六九三メートルの一八ホールはショートホールが多く、ホールインワンを近くしやすい狙いやすい構造となっている。初心者も気軽に楽しむことができるコースである（一般社団法人 あびら観光協会『安平町 黄色の絨毯の上で。』）。

写真 鹿公園 写真入ル

第二節 安平山スキー場

安平山(あんぺいざん)スキー場の概要 安平町追分に位置する安平山スキー場は、地域住民にとって身近な冬のレクリエーション施設として親しまれている。また、新千歳空港が近いこともあり、空港から直接タクシーや鉄道・レンタカーを利用して来場する道外観光客や訪日外国人観光客も見受けられる。このスキー場は、多彩なゲレンデを有し、初級・中級・上級の三コースに加え、自然の中で滑走を楽しめる林間コースも備えている。また、無料で利用できるソリ専用コースがあり、小さな子どもでもスキーヤーやスノーボーダーを気にせず、安心して楽しむことができる『広報あびら』N.0.130、2017年一月。

サービスの向上 平成三十一年(二〇一九)年からは、町内在住の主歳以上の未就学児(中学生までの子ども)たちがリフトを無料で利用できることになった。この制度は、各子ども園や学校で配布される「アリナ使用・プール遊泳許可証」をスキー場窓口に提出することで適用され、若い世代にスキヤスノボードの楽しさを気軽に体験してもらうことを目的としている。これにより、町内の子どもたちは自然豊かな安平山で冬の本格的なスキーを楽しめるようになった(『広報あびら』N.0.152、二〇一九年十月)。

安平山スキー場では、オープン後もゲレンデの状況や滑走コースの制限情報を、追分ネキ連盟がフェイスブック町がWEBサイトやLINEで随時発信しているため、来場者は事前に最新の情報を確認することで、より快適で安全なウインタースポーツを楽しむことができる。スキー場の開業日には、多くのスキーヤーやスノーボーダーが訪れ、賑わいを見せている『広報あびら』N.0.82、二〇一三年一月、追分スキー連盟フェイスブック。

さらに、親子で楽しめる日中券の親子セットや、スキー・スノーボードを満喫した後に「ぬくもりの湯」を利用できる「ぬくもりセット」も、リーズナブルな価格で提供されている『広報あびら』N.0.130、二〇一七年一月。

写真 安平山スキー場 写真入ル

第三節 鶴の湯温泉

鶴の湯温泉の再生 鶴の湯温泉は、明治四十八年(一八七二)年、傷を負った鶴がこの温泉で治療したという伝承に基づき「鶴の湯温泉」と名付けられた名湯で、『早来町史』より、鶴の湯温泉は、植苗村美々で駅通・宿泊業を営みダンク運送の仕事をしていた井上利三郎によって明治四十八年(一八七二)年に発見された温泉である。井上利三郎はフモンケ地区開拓の先駆者となった佐々木駒吉とも深い関わりがあり、地域の発展に寄与した人物である。この温泉は病鶴が沢地に浴して病を癒したとの言い伝えから「鶴の湯温泉」と名付けられた『早来町史』より)。その歴史と名高い知名度は、地域住民のみならず、町外からも多くの訪問者を

惹きつけている（安平町WEBサイト）。温泉の泉質は含硫黄・ナトリウム塩化物・炭酸水素塩泉で、疲労回復や健康維持に効果があるとされている。

この歴史ある鶴の湯温泉は、旧早来町時代から再生計画が進められていたが、町の財政難と経営者との間で計画の相違が原因で進展しなかった。しかし、地元の**名湯公衆浴場**である「早来湯」が廃業したことを機に、早来地区に限らず町全体で鶴の湯温泉の存続が必要と判断され、再生事業が本格的に始動し、平成二十一（二〇〇九）年、三友プラントグループ「早来工営」が運営主体として再構築することになった『広報あびら』N.五二、二〇一〇年七月）。翌二十二年七月二十三日に竣工式を迎え、八月の正式オープンを果たした。木造平屋建ての宿泊施設を併設するこの温泉施設は、地域のシンボルとしての役割を果たしており、外観はオレンジ色の屋根が美しく映える風景となっている『広報あびら』N.六六、二〇一一年九月）。

温泉施設の魅力とサービスの向上 施設には鶴の像が多数設置されており、訪問者はその趣ある演出を楽しむことができる。男女浴場にはそれぞれ二体ずつ設置され、庭園とも調和する美しい景観を醸し出している。訪問者は温泉だけでなく、リニユールによって設けられた休憩スペースで軽食を楽しむこともでき、風呂上りのひとときをさらに充実させる工夫がなされている。鶴の湯温泉は、地域の観光資源としても重要な役割を担っており、より多くの地域住民や観光客に気軽に利用してもらえよう努めている『広報あびら』N.六六、二〇一一年九月）。

写真 鶴の湯温泉 写真入ル

第四節 菜の花畑

丘陵が生む独特な美しさ 安平町の「菜の花畑」は、春の訪れとともに広がる美しい黄色の景観で、多くの観光客を魅了している。菜の花は、主に追分地区を中心に町内のいくつかのほ場で栽培され、五月中旬～六月上旬にかけて満開の見頃を迎える。この季節には、まるで黄色い絨毯が広がるかのような風景が楽しめる。特に、丘陵地に咲く菜の花畑は、平坦な場所で見られる他の地域とは一線を画し、高低差がもたらす波打つような花の姿が特徴である。この独特な景観はSNSでも広く注目され、訪れる人々に北海道らしい自然の美しさを提供している（安平町なび）。

安平町における菜の花栽培は、平成二十二（二〇一〇）年に地元農家三軒が結成した「北のなのはな会」によって開始された（『産経新聞』二〇一三年六月七日）。この取り組みは、再生可能エネルギー資源の生成、観光資源の創出、特産品の生産を目的とし、町内有志の並々ならぬ努力のもとで展開されてきた（『広報あびら』N.一八一、二〇二二年七月）。

追分美園エリアを中心に約八カ所、総面積約四〇㍍にわたって菜の花が栽培されており、

毎年六月中旬には畑が鮮やかな黄色に染まり、甘い香りが一帯を包む（広報あびら」N.181、2022年七月）。この景観は多くの観光客を魅了するだけでなく、菜の花を利用したはちみつや菜種油の生産にも寄与している（産経新聞」2023年六月七日）。

菜の花は観光資源であると同時に、地元の特産品である菜種油の原料としても重要な役割を果たしており、持続可能な農業を促進するため、毎年作付場所を変え、連作障害を防ぎつつ、毎年異なる景観を提供している。（広報あびら」N.181、2022年七月）。

これらの努力により、菜の花畑は安平町の観光資源として定着し、地域振興に大きく貢献する存在となっている。町内有志の情熱と工夫が結集した取り組みは、単なる農業活動にとどまらず、地域の未来を支える重要な要素へと成長している。

菜の花さんぽ 一般社団法人あびら観光協会と町が共催し、毎春に開催される「菜の花さんぽ」というイベントは、菜の花鑑賞と町内観光を組み合わせた盛りだくさんのプログラムが魅力である。令和五（2023）年の菜の花さんぽでは、訪れた人々が、トラクターに引かれた幌馬車に乗り、ほ場をゆったりと巡る「菜の花ドライブ」や、菜の花畑の中を通るさんぽ道で写真撮影ができる「菜の花遊歩道」などで楽しんだ。また、ボランティアガイドとともに菜の花畑を巡るフットパス（徒歩観光）も人気のプログラムである。さらに、町内の飲食店ではこの季節限定の菜の花メニューが提供され、道の駅「あびらD51ステーション」では特産品の販売や道の駅から町内の飲食店を回遊するスタンプラリーなどが催された。この年の「菜の花さんぽ」には、約十七万人もの来場者が訪れ、町全体が菜の花と観光で賑わった『広報あびら』N.203、2023年五月）。このイベントは、菜の花畑の美しい景観を楽しんでもらうとともに、町内で複数の観光スポットを巡る仕組みを提供し、町全体の活性化に大きく貢献している（安平町なび）。

写真 菜の花畑 写真入ル

第五節 あびら夏！うまかつり

祭りの概要 安平町最大の夏祭りである「あびら夏！うまかつり」は、平成二十一（2009）年、「かしわまつり」と「メロンまつり」を統合して誕生し、毎年七月に「ときわ公園」を会場に開催されている。町の特産品である「アサヒメロン」や「はやきた和牛」などの食文化、馬産地としての「馬」文化、そして多彩な芸能・パフォーマンスが融合した独自のコンセプトを持ち、地元住民や観光客に夏の楽しさを提供しながら、町の魅力を広く発信している（『広報あびら』N.189、2023年三月）。

祭りは二日間にわたって開催され、初日には一二〇〇発の花火大会が行われ、夜空を彩る壮大な演出が来場者を魅了する。二日目はタレントショーがメインとなり、人気アーテ

イストや地域のパフォーマーによるステージが観客を楽しませるほか、「アサヒメロン早食い競争」や「着ぐるみ競馬」といったユニークな競技も人気を博している『広報あびら』N.四一、二〇〇九年八月）。

また、会場では地元食材を活かした料理や特産品を使ったメニューの販売が行われ、新鮮な農産物の直売も実施されるなど、来場者が安平町の味を直接楽しめる機会となっている『広報あびら』N.一四九、二〇一八年八月、安平町なび）。

この祭りは、町内外の事業所等から多くの協賛を受けながら継続している。また、会場設営や物品の搬入・搬出には地域住民をはじめ、陸上自衛隊安平駐屯地および早来分屯地隊員、地元企業のボランティアも参加しているなど、地域一体となった運営体制が整えられている（『広報あびら』N.二〇八、二〇一三年十月）。

なお、新型コロナウイルス感染症の影響で、令和二（二〇二〇）年と令和三年は中止となったが、令和四年には感染防止対策を講じながら規模を縮小して開催された。町民からの根強い支持もあり、町民や来場者が楽しめる恒例の祭りとして定着し、近年では二万八千人ほどの来場者が訪れている。

写真 あびら夏ーうまかつり 写真入ル

第六節 ノーザンホースパークマラソン

ノーザンホースパークマラソンの歩み ノーザンホースパークマラソンは、苫小牧市に位置するノーザンホースパークを舞台に開催されるマラソン大会で、平成二十三（二〇一一）年五月十五日に初めて開催され、子どもから一流選手まで約千三百人が参加する大会として始まった。この大会には安平町が共催しており、安平町内の自然豊かな遠浅や富岡の地域がマラソンコースの一部に設定され（図表11-3-3）、多くのランナーが風光明媚な町内を駆け抜ける『広報あびら』N.六三、二〇一一年六月および「ノーザンホースパークマラソン二〇〇四【公式】」。町民の関心も高く、平成二十三年の安平町からのボランティア人数は、当初の目標一五〇人を超える二三七人が参加した（安まち第三一号『安平町史資料』平成二十三年五月十八日）。

マラソンブームを背景に、延べ登録人数は、平成二十三年の一三三〇人から、平成二十七年には二二二一人規模へと拡大し（ノーザンホースパークマラソン公式WEBサイト）、町内外からの多くのランナーが春の安平町を快走した『広報あびら』N.一一一、二〇一五年六月）。

図表11-3-3 入ル

地域住民と共に 平成二十三（二〇一一）年の第一回大会から、町民もランナーやボランティアとして大会を支え、地域一体となった大会の様子が見られる『広報あびら』N.一三

五、二〇一七年六月)。このマラソン大会は、安平町の春の風物詩として多くの人々に親しまれているイベントである『広報あびら』N.〇・一四七、二〇一八年六月)。また、レース以外にも様々なブースや催し物が行われ、安平町民だけでなく、訪れた多くの人々が楽しむイベントでもある『広報あびら』N.〇・一五六、二〇一九年六月)。

写真 ノーザンホースパークマラソン入ル

第七節 ゴルフ場

町内に多くのゴルフ場がある安平町は、ゴルフアーたちに「ゴルフ銀座」と呼ばれており、新千歳空港からのアクセスの良さからも、ゴルフ好きの注目を集めている。

安平町内のゴルフ場

アロハカントリー倶楽部 (早来緑丘一六八二) 一八ホール・パー七二、六七四二ヤード。フラスコなフェアウェイで、ダイナミックな攻めが基本のアウトコース、緻密な計算と精神力が要求される、飽きの来ないインコースが、ゴルフアたちの挑戦意欲をかきたてる。営業は、四月～十一月下旬。

安平ゴルフ倶楽部 (早来富岡四三八二) 一八ホール・パー七二、七〇八〇ヤード。セバトバレンテ中水監修による戦略性と魅力にあふれるチャンピオンコース。田樺林と池のコントラストが美しい十三番ホールなど、美しい景観が広がる。五人乗り乗用カートで疲労度も軽減。営業は、四月～降雪まで。

早来カントリー倶楽部 (早来新栄六七一一) 三六ホール・パー一四四、一四一四一ヤード。ザロートナメント開催を念頭に設計された北ウイングは距離もありフェアウェイも広い。自然の起伏を活かした南ウイングは、距離は短めだが随所にスパイネを効かせた仕上がりになっている。

北海道クラシックゴルフクラブ (早来富岡四〇六) 一八ホール・パー七二、七〇五九ヤード。ジヤンク・ニカラワネデザインの間コース。どこまでもフラスコに広がる原野の中に、池が絡むホール、バンカがガードするホールなどがレイアウトされ、豊かな水と雄大な自然を一体化し、アート性、戦略性豊か。

SIRL.パタワゴルフコース (追分春田一一) 一八ホール・パー七二、七〇八〇ヤード。全体に高低差があり、「樹木に狩る」ワンダラシグコース、砂丘の罫「ジュンズ」コースなど、特色あるプレーが楽しめるコース。乗用カートで楽々プレー。

(一般社団法人 あびら観光協会『安平町 黄色の絨毯の上で。』)